短 報

北海道植物新産地報告(4)(伊藤浩司)

Koji ITO: New Localities of Hokkaido Plants (4)

(11)ダキバヒメアザミ *Cirsium amplexifolium* (Nakai) Kitamura

ダキバヒメアザミはその総苞片が花時著しく反曲または平開するのと，茎葉が広く茎を抱き，かつその基部が耳状に広く開く独特の形をしている(図1，右)ので，北海道のアザミ類では容易に見分けられる種類である．伊藤らの北海道高等植物目録(IV: 157, 1991)には本種は日高と十勝地方に分布することになっているが，十勝地方の分布は，札内川流域でみられたものに基づいている．ダキバヒメアザミはまた，変異が大きく，ことに茎葉の刺の状態や葉の形状など実際の標本のみならず図鑑類でも多少とも迷うような個体に出会うこともまれではない．十勝のものをダキバヒメアザミと考定するのに数年の観察を必要とした．しかしそれでも花時頭花が点頭することは(図1，左)，本州のダキバヒメアザミが花時直立するという記載とは合致しない．記載の上では札内川の植物はまたガンジュアザミに似ている点もあるが，北大や京都大学所蔵の多数の標本に当たった結果現時点ではダキバヒメアザミに考定しておく．新種か新変種の可能性があるかも知れない．上記十勝札内川河畔の渓畔林林縁に自生する個体に基づいて要点を記述しておく．

根茎は短く，細い根を数本生ずる．茎は高さ1.5-2 mに達し，緑色，無毛，根葉は花時生存しない．茎葉は広楕円形-長楕円形，葉は長さ15-24 cm，幅9-16 cm，先端は鋭形または急鋭形で短尾状に尖り，基部は無柄，急に狭まり広く耳状となって茎を抱く．葉身は分裂しないか，または下



図 1. ダキバヒメアザミ *Cirsium amplexifolium* (Nakai) Kitamura. 左: 頭花は下垂する．右: 葉の基部は茎を抱く．

部羽中裂乃至深裂し，羽片は1－2対，辺縁は全縁，刺はややわらかく，無毛または上面脈上に短縮毛を散生する．頭花は茎の上部の葉腋から長い花柄を生じ先端に単生するか，時に花柄の上部は二岐して苞葉に支えられ，小花柄上に頭花を単生する．頭花は蕾時直立，花時点頭する．頭花の基部には長さ約2mmの剛い刺が数本ある．総苞は鐘形で長さ16–20mm，幅20–30mm，粘着しない，片は1中肋，他に薄く3－5脈あり，外片は最も短く披針形，基部幅1.5－2mm，内片は披針形，先端長鋭形，辺縁短縮毛がある．総苞片は蕾時直立，花時いちじるしく上半部が反曲または平開する．花冠は帯紫色で長さ17mm，花冠の狭窄部は膨大部の約1/2（5mm: 12mm），冠毛は長さ約13mm，乾燥時褐色．果実は濃赤褐色，平滑，少し光沢あり，長さ3.5－4mm，冠毛は汚褐紫色，長さ22–25mm，嘴は不顕著．

十勝国上札内村札内川流域見定めの沢，1986，VII 31，伊藤浩司採集．

(12)**オクエゾキツリフネ**

Impatiens nolitangere L. f. **hemileuca** Ko. Ito & Hinoma, f. nov.

A typo differt petalis albis, sed calyce luteis.

Habit.: No. 4 Bridge of the Ishikari River, Aizankei, Kamikawa T. Kamikawa Pref., on the edge of broad-leaved forest, 24, Jul. 1985. Koji Ito & Akira Hinoma–Typus in SAPT.

キツリフネの1品種で，花冠の花弁が白く，萼は黄色の個体である．上川郡愛山渓広葉樹林林縁で採集された．石狩国上川町愛山渓石狩川第4号橋付近広葉樹林縁，伊藤浩司・日野間彰採集．

(13)**トヨコロスミレ**

Viola patrinii DC. f. **toyokoroensis** Ko. Ito, f. nov.

Petala toto alba, purpureo-striatis nullis.

Habit. Chobusi-Numa, Ohtsu-Genseikaen, Toyokoro, Tokachi Pref., wetland, on 13 June 1993, Koji Ito & Akira Hinoma–Typus in SAPT.

十勝国豊頃町大津原生花園の湿地中に自生のシロバナスミレの1品種で，通常の白色花弁に紫の条線を欠くものである．十勝国豊頃町長節沼湿原．伊藤浩司・日野間彰採集．

(14)**タカネタンポポ** *Taraxacum yuparense* H. Koidz.

芦別市滝里の空知川にそって，長瀞公園という小さなレクリエーションエリアがある．この公園の一方は空知川沿いの段丘となり，川に突き出た露岩がみられる．この岩石の割れ目に沿って小型のタンポポが生えているが，明らかに公園の中に大群生しているセイヨウタンポポとは異なっている．いうまでもなく総苞片は反り返らず，また葉の切れ込みも一層深く，紛れもなくタカネタンポポである．この種は日高山脈や夕張山地の高山帯に生じ，また蛇紋岩土壌との結びつきも想像されるが，空知川の岩は蛇紋岩とは無縁である．このような日高山脈や夕張山地のいわゆる高山植物が低地に下降して生育している例は，やはりこのタンポポについて，かって筆者は日高地方の海岸沿いの地で採集したことがある．因みにこの植物はアマチュア植物家の間ではアシベツタンポポと呼ばれているそうである．

(15)**スナヂミチヤナギ** *Polygonum arenastrum* Boreau

スナヂミチヤナギはかって筆者が *P. calcatum* Lindmanの学名で報じたミチヤナギの1種である（本誌 **39**: 71, 1964）．この植物は痩果が完全なる三稜形でなく，二面は広く且つ凸面であり，残り一面は狭く凹面であるか，殆ど面を欠き凸るレンズ状になる点で特徴的なミチヤナギである．一般に葉は線形で狭く鋭形である．花は葉腋に2–3個つき，花被の癒合部と花被片はほぼ同長である．果は長さ1.5–2.5mmある．筆者が1978年9月砂川市内石狩川堤防上で採集したミチヤナギはスナヂミチヤナギに含まれると思われるが，花は小形，花被片は方形，鈍～鋭頭，長さ1.8mm，幅0.6–0.8mmであり，花被片はその癒合部の倍長あり，果もまた小さく，長さ2mm，幅（最大面）1.3mmで，その形も楕円形レンズ状のものと卵状三稜形のものとがまじっていて，必ずしも典型的なスナヂミチヤナギでない．このようなタイプのミチヤナギは *P. microspermum* Jordan ex Boreauを想起させる．

（静修女子大学）